

巻頭特集 コホート連携の最前線

疫学会会員の皆さまはよくご存知のとおり、日本には優れたコホート研究が数多く存在しています。個々のコホート研究から健康に資するエビデンスが続々と創出される一方で、サンプルサイズの問題を克服するために、各コホート研究の大規模化とともに、コホート研究間の連携と統合が世界中で進められています。コホート連携の意義は、単独のコホート研究の枠を超えた大きなサンプルサイズを取り扱えることだけではなく、そこで培われた研究のノウハウや人的ネットワーク等も大きな財産です。別々に立ち上げられたコホート研究同士を連携することは困難を伴いますが、それを補って余りある価値があるといえます。

そこで今回は「コホート連携」をテーマとし、成人コホートの連携、出生コホートの連携、海外コホートとの連携の中心でご活躍されている3名の先生より、各連携の目的から役割、成果、今後の展望までを視野に入れた記事をご寄稿いただきました。

(東京大学・東北大学 村上 慶子)

EPOCH-JAPAN

東邦大学医学部 社会医学講座医療統計学分野 教授
村上 義孝



EPOCH-JAPAN (Evidence for Cardiovascular Prevention from Observational Cohorts in Japan) は、主に循環器疫学のコホート研究者が連携した共同研究プロジェクトである。本プロジェクトは厚生労働省研究班を母体としており、初代の研究代表者(敬称略)は上島弘嗣(滋賀医科大学名誉教授)(2005-10年度)である。その後、岡村智教(慶應義塾大学教授:2011-19年度)に継承され、現在は村上義孝(東邦大学教授:2020年・現在)が務めている。

EPOCH-JAPANは現在、13の地域コホート(端野・壮瞥、大迫、大崎、茨城県、小矢部、滋賀国保、吹田、放影研コホート、久山町、CIRCS(大阪・

秋田)、岩手県北、鶴岡、神戸)、2つの職域コホート(YKK、愛知職域)、4つの全国規模のコホート(NIPPON DATA80、NIPPON DATA90、JACC、JMS)の合計19コホート研究

から構成されており、対象者数は約20万人、平均追跡期間は約15年である。本研究の参加コホートはわが国で著名な研究であり、対面調査による精度の高い測定値、カルテ調査等に基づく正

CONTENTS

巻頭特集「コホート連携の最前線」	日本疫学会プレセミナー2026について
EPOCH-JAPAN	後藤 温 5
..... 村上 義孝 1	日本疫学会サマーセミナー2025開催報告
日本の出生コホート連携の取り組み	清原 康介 6
..... 石黒 真美 2	「第6回疫学若手の会合」開催報告
アジアコホート連合	古川 拓馬 7
The Asia Cohort Consortium: ACC	一般社団法人日本疫学会代議員・選出
..... 井上 真奈美 3	理事・監事・理事長選挙について
第36回日本疫学会学術総会・第3回国際疫学会西太平洋地域	事務局だより
合同学術集会「Epidemiology and Global Issues: Addressing	編集後記
Diversity, Complexity, and Inclusion」開催のご案内	金子 聡 4
..... 金子 聡 4	

確なエンドポイント、長期間の高追跡率など、質の高いコホート研究が満たすべき条件を有している。

本プロジェクトの特徴として、国民の健康に資する科学的根拠(エビデンス)の創出がある。開始当初に厚労省研究班として、特定健診・特定保健指導の科学的根拠(エビデンス)の検証が求められており、この課題解決に向けて、多種多様なコホートデータを統合し、一つのデータベースを構築したことで、班員が一丸となり議論を重ねた。そして解析と論文作成には将来の

疫学を担う若手研究者が担当し、滋賀医科大学の研究事務局と共にデータ解析等を行うことで、有機的なつながりを深めていった。多数の学術論文と大学を超えた人的交流は本プロジェクトの大きな成果であり、共同研究で醸成された信頼関係は他の研究へと波及していった。

国民の健康のエビデンスは本プロジェクトの中核テーマであり、健康日本21(第二次)や日本高血圧学会や日本動脈硬化学会のガイドラインなどにも継続的に基礎資料を提供している。最

近のEPOCH-JAPANでは、新たに約1.5万人の経時測定データの統合データベースを構築・解析しており、公的データを用いた全国民のためのPersonal Health Recordsの利活用の参考となる基礎資料が作成中である。アジア・太平洋地域における大規模な循環器コホートデータベースであるEPOCH-JAPANは、日本人集団における貴重な研究成果でありわが国の知的財産といえよう。最後に、18年間にわたる本プロジェクトに関わった全ての方々に感謝を申し上げ、本稿を終えたい。

■プロフィール

1993年東京大学医学部保健学科卒業後、1998年に同大学院保健学専攻で博士号を取得する。その後大分県立看護科学大学助手、国立環境研究所特任研究員を経て、滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門に特任講師で赴任する。同大学ではEPOCH-JAPANをはじめとする循環器疫学研究を推進し、同大学医療統計学部門准教授となる。2014年より東邦大学医学部社会医学講座医療統計学分野教授に就任、現在に至る。

日本の出生コホート連携の取り組み

東北大学
石黒 真美



日本には、貴重な出生コホート研究がたくさんあり、疾患の原因や機序の理解、予防、治療法の探索を協同することで疾患克服を目指す取り組みがなされています。日本医療研究開発機構 成育疾患克服等総合研究事業—BIRTHDAYでは、「受精や妊娠、胎児期から乳幼児、生殖期までの各ライフステージと成育サイクルの観点において健康課題克服に向けて病態解明と予防、治療のための研究開発と実用化」を推進しており、その一環として疾患克服のための出生コホート連携を通じて新たなエビデンスの創出が行われています。2019年度から2023年度にかけては、周産期に焦点を当て、妊娠高血圧症候群のリスク要因を検討しました。特に喫煙は欧米人では妊娠高血圧症候群のリスク低下との関連が示唆さ

れておりましたが、日本人ではリスクを増加する要因であることが明らかとなりました。また、不妊治療も妊娠高血圧症候群との関連が示唆されておりましたが、高齢であることが交絡する可能性も指摘されておりました。そこで、年齢を35歳未満と35歳以上の妊婦さんの群に分けて不妊治療と妊娠高血圧症候群との関連を検討したところ、どちらの群でも不妊治療と妊娠高血圧症候群との関連が認められました。日本では2022年から不妊治療の保険適用が拡大され、体外受精や顕微授精を選択する機会が増えましたが、不妊治療による妊娠では血圧のモニタリングを注意深く行う必要があることを論文で報告しました。さらに、日本で近年課題となっている在胎不当過小(SGA)児の増加に対してアプローチ法を見出

すため、SGAのリスク因子毎の人口寄与危険割合を算出し、妊娠前のやせと、妊娠中の体重増加不良の寄与危険割合が高いことを明らかにしました。これらの知見は全て出生コホートでの解析結果を基にメタアナリシスを行うことで見出されたものです。各出生コホートは全国各地で実施されており、リクルート時期も異なりますが、それぞれの集団での結果を統合的に解析することでより確度の高い疾患のリスクや予後のエビデンス創出が可能となります。また、出生コホート連携で見出された知見を基にして構築された妊娠高血圧症候群やSGAのリスク予測は、国立研究開発法人情報通信研究機構での研究課題に繋ぎ、ツールとして自治体等で活用いただけるよう実装準備が進んでいます。

この出生コホート連携によるエビデンス創出の枠組みは2期目に入り、周産期から乳幼児期、学童期を対象をシフトして、特にお子さんの肥満や発達に焦点を当ててそのリスク要因と予後の解明に取り組んでいます。1期目で

培ったdata harmonizationのノウハウを基に、今期はindividual participants dataでの解析も進めています。さらに、その枠組みを超えて全国出生コホートコンソーシアム(JBiCC)も立ち上がり、2025年9月現在で9つのコホート

研究が参画しています。日本の宝である出生コホート研究の交流がますます活発になり、連携を通じて単独のコホート研究だけでは難しい疾患解明も進むのではないかと期待されます。

■プロフィール

2013年3月に東北大学大学院医学系研究科博士課程修了。

2012年4月より東北大学東北メディカル・メガバンク機構に助手として入職。2013年4月から助教、2020年2月から講師として三世代コホート調査業務に従事し、現在に至る。

アジアコホート連合 The Asia Cohort Consortium: ACC

国立がん研究センターがん対策研究所
井上 真奈美



アジアは様々な民族集団とそれらを特徴づける歴史、宗教、習慣が複合的に形成された地域です。各国における社会経済構造も大きく異なり、また変化しています。アジアコホート連合(Asia Cohort Consortium: 以下ACC)は、アジア地域におけるコホート研究の大規模な研究連携基盤です。ACCは、アジア地域をベースとする、またはアジア地域に興味を持つ疫学研究者たちにより、この地域における疫学の発展に貢献することを目的として2004年に設立されました。ACCには二つの使命があります。一つは、アジアにおける協働プロジェクトやプール解析のためのプラットフォームとして機能すること、もう一つは、ゲノム等のバイオサンプル収集を含む新たなコホート研究を立ち上げる際にインキュベーターとしての役割を果たすことです。具体的には、アジア人を対象としたプール解析を実施したり、新たなコ

ホート研究集団の構築に向けて知的支援(共通の手順とノウハウの提供)を行っています。

2025年現在、バングラデシュ、ブルネイ、中国本土、インド、イラン、日本、韓国、マレーシア、モンゴル、シンガポール、台湾の45のコホート研究がACCに参加し、100万人規模のプール解析を実施しています。さらに、韓国、マレーシア、シンガポール、台湾ではそれぞれ10万人超規模の新たなコホート研究が開始されました。ACCの研究調整センターは日本の国立がん研究センターに設置され、ACCの使命達成に向けた多様な研究活動を円滑に進めるための管理業務を担当しています。ACCメンバーは現在、アジア地域における様々な危険因子と健康アウトカムに関する複数の疫学研究で協力しております。ACCはこれまでに40本以上の原著論文を発表し、40以上のプロジェクトが進行中です。

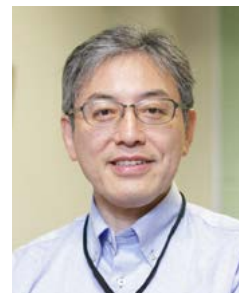
2004年の設立から20年にわたり、ACCはアジアにおける疫学スキルの向上、ならびに疫学者間の研究ネットワーク及び活動の拡大に貢献してきました。一方で、データのHarmonization、倫理的・法的问题の解決、バイオサンプルの利用、資金調達など、多くの課題が残されています。参加研究者はこれらの課題を克服すべく協力して取り組む必要がありますが、アジアの疫学研究者が皆で解決策を考え、課題解決を進めていくことが重要と考えています。加えてACCでは特にアジア地域の若手研究者の参画を推進しています。興味のある方は、毎年秋に行われる年次総会(現地とオンラインのハイブリッド、次回は2025年10月30-31日中国鄭州にて)や春の研究者交流や意見交換を目的とした会合(次回は2026年1月30日JEA長崎会議時)にご参加下さい。

<https://www.asiacohort.org/>

■プロフィール

1990年筑波大学医学専門学群卒、1995年博士(医学)取得(名古屋大学)、1996年ハーバード大学公衆衛生大学院科学修士課程(疫学専攻)修了。愛知県がんセンター研究所、国立がんセンターがん予防・検診研究センター、東京大学大学院医学系研究科などを経て、2023年より国立がん研究センターがん対策研究所副所長。

第36回日本疫学会学術総会・ 第3回国際疫学会西太平洋地域合同学術集会 「Epidemiology and Global Issues: Addressing Diversity, Complexity, and Inclusion」開催のご案内



第36回日本疫学会総会・第3回国際疫学会西太平洋地域合同学術集会 会長
長崎大学熱帯医学研究所 生態疫学分野 教授
金子 聡

第36回日本疫学会学術総会は、国際疫学会西太平洋地域（IEA-WPR）との合同大会として、2026年1月28日（水）～30日（金）に「出島メッセ長崎」にて開催されます。現代の疫学は、データ科学や因果推論、国際的連携の深化などを背景に新たな局面を迎えつつあります。一方、感染症のパンデミック、気候変動、紛争や災害、社会の複雑化、貧困層の健康格差といった課題は世界的に深刻さを増しており、これらにどう向き合うかが喫緊の課題です。こうした背景から、「Epidemiology and Global Issues: Addressing Diversity, Complexity, and Inclusion」をテーマに掲げ、疫学の社会的貢献とその未来を探る議論を行います。

メインシンポジウムでは、貧困層の感染症、紛争・災害、複雑化する社会、気候変動の4つのテーマに焦点を当て、それぞれの分野で活躍される著名な先生方に登壇いただき、疫学に何を期待するかを語っていただきます。疾患や地域を超えて広がるこれらの課題に、疫学がどのように応えるべきかを問い直す機会になるはずです。

特別講演には、WHO Pandemic and Epidemic Intelligence Hub所長であるDr. Chikwe Ihekweazu氏をお招きして、次なるパンデミックに備えた国際的な動向とその疫学的基盤について講演いただきます（AMED SCARDA事業協賛）。さらに、SCARDAとの連携企画として、ワクチンと疫学の融合をテーマにしたシンポジウムも開催予定です。

また、感染症とがんの接点を掘り下げる国際委員会主催シンポジウム、プラネタリーヘルスの概念を疫学にどう取り込むかを議論するセッション、IEA-WPRとの連携によるデジタル技術・AIと疫学の最前線の議論、島嶼地域の疫学に焦点を当てたセッション、がん疫学の最新動向、若手研究者支援のための「良い論文の書き方」講座など、多様な視点から多角的に展開します。

特筆すべきは、2025年が被ばく80周年という節目であることから、開催地・長崎の歴史をふまえた「被ばくと疫学」をテーマにした特別シンポジウムも予定しています。放射線と健康に関

する疫学研究の歴史的蓄積と未来への継承について、国内外の研究者とともに考える貴重な機会です。

本大会では、全演題発表が英語で実施されます。600件近い演題応募をいただき、現在査読準備を進めております。可能な限り多くの演題を採択すべく、ポスター会場も拡張し、多くの方に発表の機会を提供する方向で準備を進めています。

会場の「出島メッセ長崎」は、JR長崎駅に直結した最新のMICE施設で、アクセスも良好です。長崎には、軍艦島や大浦天主堂などの歴史的観光地も多く、異文化が交錯する街並みや食文化も魅力です。懇親会では長崎らしい演出やお楽しみ企画も予定しています。国際色豊かな交流の機会となれば幸いです。新しく、そして古き良き長崎で、皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

<https://joint-jea-ieawpr2026.jp/>



■プロフィール

1990年 防衛医科大学校卒業/1997年 Harvard School of Public Health修了(MPH) /2001年 産業医科大学大学院医学研究科(博士(医学))修了/2001年国立がんセンター研究所がん情報研究部がん情報システム室長/2005年長崎大学熱帯医学研究所教授

日本疫学会プレセミナー2026について

横浜市立大学 後藤 温



第36回日本疫学会学術総会(2026年1月、金子 聡会長・長崎大学大学院教授)において、「日本疫学会プレセミナー」を開催することになりました。本企画は、日本疫学会会員の人材育成および研究力の向上を目的として実施いたします。毎年恒例となった本プレセミナーでは、学会会員から広くセミナー企画を公募し、学術委員会疫学教育推進WGにより厳正に審査の上、多彩で魅力的なプログラムが選定されました。

今回のプレセミナーは、疫学の基礎から応用までを広く網羅し、初学者から中堅研究者まで幅広く参加できる内容を揃えています。理論的背景を整理するとともに、実際の研究現場で役立つ具体的な手法や考え方を身につけられる実践的なセミナー構成となっています。

開催概要

- ・日時：2026年1月28日(水)
13:00～17:30
- ・会場：出島メッセ長崎(長崎市)
- ・実施形態：現地開催
(一部後日オンデマンド配信予定)

企画概要

企画1

「日本人の食事摂取基準：『疫学で作り、疫学で使う』を考える」

【企画者】

佐藤 俊太郎

(長崎大学病院 臨床研究センター)

本セミナーでは、管理栄養士や医

師、疫学研究者など、食事摂取基準を研究や実務で活用する立場の方々を対象に、策定の背景や科学的根拠を丁寧に解説します。さらに、実際に臨床や公衆衛生現場でどのように用いられているかを紹介し、将来の基準づくりにおける課題や展望にも言及します。疫学と栄養学を架橋する実践的な知識を体系的に学ぶことができます。

企画2

「『ターゲット』からはじめよ 一意味ある Target trial emulation を疫学研究で実践するために」

【企画者】

竹内 由則(横浜市立大学)

観察研究において因果推論を可能にするために注目されているTTE(target trial emulation)の基本的枠組みを、理論と実例を交えて解説します。因果推論におけるレジメの考え方、時間依存性治療や交絡への対処法、3-step法などTTEに頻用される研究デザインや解析手法を詳しく紹介します。さらに、実際のデータを想定したサンプル解析コードを配布し、参加者が自らの研究に応用できるようサポートします。

企画3

「持続可能なUHCと公平な制度設計を考える上で疫学者が知っておきたいリアルワールドデータ活用術」

【企画者】

伊藤 ゆり(大阪医科薬科大学)

ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ

(UHC)の達成や制度設計の公平性を議論する上で不可欠となるのがリアルワールドデータです。本セミナーでは、日本で現在利用可能な各種データソースの特徴や利点・限界を整理し、具体的な活用法を紹介します。さらに、患者や市民を含む多様なステークホルダーと課題を共有するための方法論についても議論し、研究成果を社会に還元するための視点を提供します。

企画4

「交互作用(interaction)を制すものは疫学を制す!」

【企画者】

岩上 将夫(筑波大学)

交互作用(interaction)や異質性(heterogeneity)は疫学研究において重要な鍵を握る概念ですが、初学者にとっては理解が難しいテーマです。本セミナーでは、歴史的に重要な解説書や論文を通じて基礎を整理した上で、遺伝環境交互作用(gene-environment interaction)など具体的な研究事例を紹介します。単なる理論解説にとどまらず、自身の研究にどのように応用できるかを具体的に考える機会を提供します。

プレセミナーは、疫学研究の幅を広げ、世代や分野を超えた交流を促す貴重な場です。各セミナーの詳細(時間、会場、申込方法等)は総会HP(https://joint-jea-ieawpr2026.jp/jp_pre-seminar/)をご参照ください。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

日本疫学会サマーセミナー2025開催報告

学術委員会 疫学教育推進ワーキンググループ
大妻女子大学家政学部食物学科公衆衛生学研究室
清原 康介



2025年8月24日(日)、日本疫学会サマーセミナー2025『論文アクセプトへの実践ガイド：四大ジャーナルとの闘いから学ぶ』が開催されました。本セミナーは、サマーセミナー開始以来15年目にして初めて関東圏を離れ、大阪大学中之島センターを会場として開催するという記念すべき回となりました。今回は、現地参加とオンライン配信を組み合わせたハイブリッド形式を採用し、全国から合計55名の皆さまにご参加いただく盛会となりました。



本年度の講師は、NEJMやLancetなど数々のトップジャーナルに論文を掲載されている、大阪大学医学系研究科環境医学教室の北村哲久先生にご担当いただきました。トップジャーナルに論文を掲載されたご自身の経験に基づき、論文投稿のテーマ設定から査読者との実践的なやりとりに至るまで、臨場感あふれるお話をしていただきました。「なぜ、Rejectされるのか？」という問いから始まり、時事性や診療ガイドラインの穴(Knowledge gap)を捉えるテーマ設定の重要性、欧米のトップ研究者を巻き込む戦略、手強い査読と渡り合うための裏話など、具体的なノウハウが惜しみなく披露され、参加者は熱心に耳を傾けていました。セミナー後半は、現地参加者が複数のグループに分かれてのグループワークが実施されました。講義内容を踏まえ、各自が関心を持つテーマでリサーチクエストを設定し、チューターのサ

ポートのもと、PECOやFINERのフレームワークを用いて、その妥当性や独自性について活発な議論を交わしました。

事後アンケートでは、回答者の100%が「期待以上」「期待どおり」と回答するなど極めて高い評価をいただくとともに、「他の人の視点をもらえて、すごく参考になった」といった声も多く寄せられ、大変熱気あふれる時間となったことがうかがえます。初の大阪開催、そしてハイブリッド形式での開催となりましたが、盛況かつ内容の濃いセミナーを開催できたのは、素晴らしいご講演をいただいた北村哲久先生、会場をご提供くださった大阪大学の皆さま、チューターとしてご協力いただいた疫学の未来を語る若手の会の世話人の皆さま、そして何よりも、熱心にご参加いただいた皆さまのおかげです。この場を借りて心より厚く御礼申し上げます。



「第6回疫学若手の会合宿」 開催報告

佐賀大学
古川 拓馬



「第6回疫学若手の会合宿」を2025年9月27日～28日に箱根で開催いたしました。疫学若手の会合宿は、コロナ禍の影響もあり2019年を最後に休止しておりましたが、世話人間で協議を重ね、このたび6年ぶりに“復活開催”することができました。

今回は「若手研究者の研究力開発～伝える力、教育スキル～」をテーマに掲げ、若手研究者のステップアップに欠かせない“伝える”（発表）スキルおよび“教育”スキルに焦点を当てました。大学院生・教員を対象に「大学で教える」スキルを学ぶプログラムや科研費の申請書ブラッシュアップ・ワークショップを主催してこられた東京大学の栗田佳代子教授を講師にお迎えし、全国各地から17名の学生および研究者が参加しました。

「専門性の高い研究をどう伝えればよいだろうか?」「講義を受け持つことになったがどうすれば興味を持って

参加してもらえるだろうか?」―若手研究者が研究発表や大学教育等の場で直面する一方、体系的に学ぶ機会が少ないこれらの課題について、講義や演習を通して学びました。グループワークや発表を通じて実践的な学術コミュニケーションの方法を体得し、より効果的に伝える力を磨きました。

はじめはやや緊張や遠慮がみられましたが、参加者同士も次第に打ち解け、敬意を持って・忌憚なく・建設的に(3K)意見を出し合い、良い点・改善できる点の双方について活発な議論が行われました。参加者の自己紹介・研究紹介を題材としたことで互い

の人柄や研究内容を知ることができ、寝食を共にする会合ならではの交流を通じて、相互理解とつながりを深める機会となりました。

「若手疫学者が集い、意見を交換し、将来を語り、そしてたまに酒を飲むこと」を目的とする若手の会として、引き続き創意工夫を凝らしながら、交流と議論の場を提供していきます。ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げますとともに、本企画にご協力くださった方々、そして疫学若手の会の活動を日頃より温かくご支援くださっている日本疫学会関係者の皆さまに、深く御礼申し上げます。



一般社団法人日本疫学会代議員・選出理事・監事・理事長選挙について

一般社団法人日本疫学会定款、代議員および役員の選任に関する細則に基づき、下記の日程で、2025年度日本疫学会代議員・選出理事・監事・理事長選挙を実施しました。

●代議員選挙

立候補受付（4/15～5/20）、告示（6/11）、電子投票（6/25～7/10）、開票（7/10）、結果報告（7/11）

※中国・四国ブロックの代議員選挙は、候補者数が定数と同数でしたので、無投票当選となり、投票は行いませんでした。

●選出理事・監事選挙

選出理事立候補・監事推薦の受付（7/23～8/8）、告示（8/12）、電子投票（8/26～9/9）、開票（9/9）、結果報告（9/10）

※北海道・東北ブロック、関東甲信越ブロック、東京ブロック、中部ブロックの選出理事選挙および監事選挙は、候補者数が定数と同数でしたので、無投票当選となり、投票は行いませんでした。

●理事長（代表理事）選挙

告示（9/16）、立候補届出（9/16～9/30）、投票受付（10/2～10/21）、10/27に開票し、11/4に開催される理事会で結果報告を行う予定です。

会員各位のご支援で円滑に選挙を実施することができました。選挙管理委員を代表し、ご報告と御礼を申し上げます。

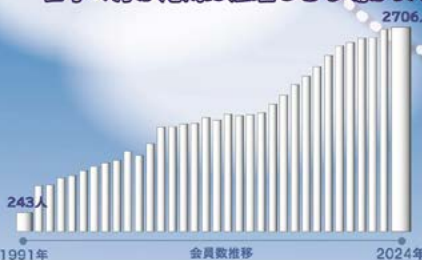
2025年10月15日

選挙管理委員長 福田 吉治



疫学

日本疫学会とは。
 1991年(平成3年)に設立。
 日本医学会連合等に参加。
 若手の方が元気に活躍できる場がある。



243人 1991年 会員数推移 2706人 2024年

日本疫学会は、人や社会の健康問題の解決を目指し、様々な分野の会員の交流の場です。医学・薬学・看護学・保健学・栄養学・福祉学・人文社会科学など健康関連活動に関わる多種多様な方々が活躍しています。皆様のご参加をお待ちしています。

学会認定の資格:疫学専門家認定制度 詳しくはこちら <https://jeaweb.jp/>



学会誌 *Journal of Epidemiology* (JE) は、国際的なオープンアクセス誌として DOAJ (Directory of Open Access Journals) の認証を得ています。
 Impact Factor 3.0 (2024)

会員 (1st author, corresponding author) は、JEへの投稿が可能です。
 掲載料 (採択時のみ): 会 員 70,000円 (8頁以上は10,000円/頁)
 非会員 180,000円 (8頁以上は10,000円/頁)

JE電子購読料: 会 員 1号あたり 1,500円 年間購読料 9,000円
 非会員 1号あたり 5,000円 年間購読料 26,000円

事務局だより

1) 会費納入のお願い

2025年度(2024年12月～2025年11月)までの年会費を納入いただいていない方は、すみやかにお支払いくださいますようお願い申し上げます。会費の納入状況は、会員専用ページの登録内容確認・変更ページにてご確認ください。

2026年度の年会費につきましては、12月に納入のご案内を送付させていただきます。

2) ご登録情報更新のお願い

会員専用ページ(<https://ap.nakamacloud.com/jea>)にログインいただき、【登録内容確認・変更】ページにて、ご登録情報を更新してください。(ログインIDはご登録のメールアドレスです。パスワードをお忘れの場合は、ログイン画面で再設定できます。)会費のお支払い状況も確認いただけます。

3) JE冊子購読のお申込み

Journal of Epidemiologyの冊子の年

間購読料(2号合本、年6回発行)は、会員:9,000円、非会員:26,000円(ともに国内送料込)です。2026年のご購読(Volume 36)をご希望の方は、事務局にお申込みください。

4) 事務局新職員の紹介

はじめまして。7月より日本疫学会事務局にお世話になっております松下英美子と申します。これまでまったくご縁のない業界でしたので、糟谷さんにお声がけいただいた時には、「疫学」という言葉にもまったく馴染みがなく、何もわからないままに飛び込んでしまいました。今でもさほどわからないままではございますが、お手伝いをさせていただきました8月のサマーセミナーでは、皆さまの熱心な活動の様子を間近で見せていただくことができ、また先生方ともお話をさせていただいて、わ



ずかながらですが日本疫学会を支える仲間に加えていただけたように感じました。糟谷さんの丁寧なご指導の下、皆さまの活動の縁の下での力持ちとなるように、今後も全力で事務局業務を行ってまいります。至らない点やご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。

5) 2025年度ご寄附

このたび、祖父江友孝先生より貴重なご寄付を賜りました。ご意向により、今後の日本疫学会事業および若手研究者の育成・支援等に活用させていただきます。日本疫学会へのご支援に心より感謝申し上げます。

6) 日本疫学会会員数: 2,797名

(2025年10月1日現在)

名誉会員: 34名 代議員: 212名
普通会員: 2,551名

編集後記

お陰様でニュースレター第66号を無事に発行することができました。本号も盛りだくさんの内容であり、疫学会の活動の充実具合が伝わったのではないのでしょうか。私は、世話人時代に携わっていた若手の会合宿の復活を喜び、来年の長崎では何をしようかとわくわくしながら拝読しました。次回の学術総会は、国際疫学会西太平洋地域合同学術集会も併せて実施されます。過去のニュースレターを読み返して、コロナ禍でオンライン開催を余儀なくされた時期を思い出し、海外からの研究者も含め現地で

一堂に会することができる喜びを感じております。巻頭特集「コホート連携の最前線」は、ご寄稿いただいた先生方のおかげで示唆に富む読み応えのある内容となりました。皆さまの今後の疫学研究のお役に立てますと幸いです。

最後になりましたが、快くご寄稿いただきました先生方、広報委員会の先生方、松下様をはじめとした事務局の皆さまに、この場を借りて深く感謝申し上げます。

(東京大学・東北大学 村上 慶子)